

3章 さいはての地へ

(1)

北海道下見の日、午前中のラッシュ時を迎えた羽田空港の出発ロビーは人があふれていた。二人が搭乗した便もほぼ満席の状態で、その半数が中高年の旅行者である。

窓側に座った雅人は則尾に耳打ちした。

「やっぱ平日は年配の旅行者が多いですね」

「でもさあ、いつも思うんだけど、飛行機に乗る人の顔って、不安そうだよな」

「鉄の塊に命を託すんですからね。オレだって緊張してますよ」

「そこなんだよな」

則尾はしたり顔をした。

「乗客の会話もさ、どこか空々しい感じで歯切れが悪い。飛行機だけに。話もうわの空ってか？ ははは、こりゃあいいや」

「則尾さん、そういうのを空笑そらわらいっていうんでしょう？」

「やべえ、やられたぜ。大前くんもいうじゃないの」

「則尾さんと一緒にいるからですよ」

「でもさ、真面目な話、列車の旅にはこんな不安というか、緊張感がないんだ。たしかに飛行機の安全性はピカイチだけど……」

そのあと声をひそめ、

「事故が起きたらアウトだ。ボクなんかちよつと揺れただけでビクビクもんだからね。よっぽど時間に急いでいるか、飛行機でなければならぬ必然性がない限りごめんだな」

「その気持ち、わかりますよ。だからJRのグリーン車の旅は、時間に余裕がある中高年には絶対ヒットするはずですよ」

しかし彼は「うくん」と渋い顔をした。

「楽観はできないよ。そういった精神的なことも含め、列車の旅のすばらしさをいかに啓蒙するかが問題だ」

「つまり、このプランの命運は、則尾さんの紀行文の出来次第ってわけですね」

「おいおい、出発前からプレッシャーかよ」

「当然でしょう。けっこうな取材費がかかっているんですからね」

「あくあ、管理職は金にシビアでやだねえ。ミュウちゃんと二人で行きたかったなあ」

「彼女の金銭感覚はオレよりシビアですよ」

「へえ、それじゃあいい嫁さんになるじゃないか。大前くん、もらってやったら？」

「そっちへの振りはやめてください」

雅人が辟易と顔をそむけたとき、ボーイング777型機は滑走路へ動きはじめた。

機体が水平飛行に入ると、機長からのアナウンスが流れる。新千歳空港の天気は快晴、気温は二十三度ということだったが、二時間弱のフライトで降り立った北の大地は、湿度が少ないせい空気はひんやりと感じられた。

「やっぱ陽射しが透明だなあ。さてと、まずは札幌だっけ？」

フライト中ずっと眠りこけていた則尾は、腫れた瞼たぶたをこすり、JRとの連絡通路に歩きはじめた。

新しい北海道プラン『日本最北・最東の岬を極める旅』は次のような日程である。

【初日・二日目】上野発・十九時〇三分【寝台特急『北斗星』・デュエット寝台】札幌着・
（二日目）十一時十五分（着後は市内観光／札幌泊）
【三日目】札幌発・七時〇三分【根室本線・特急スーパーおおぞら1号・グリーン車】釧路
着・十時五十一分（乗換）釧路発・十一時〇一分【快速ノサップ】根室着・十三時〇八分
（着後は観光タクシーで納沙布岬散策）根室発・十六時〇〇分【普通車】釧路着・十八時
十七分（釧路泊）
【四日目】釧路発・九時〇五分【釧網本線・快速しれとこ】網走着・十二時〇五分（着後、
市内および周辺観光）〈石北本線に乗換〉網走発・十七時十八分【石北本線・特急オホー
ツク8号グリーン車】旭川着・二十時五十九分（旭川泊）
【五日目】旭川発・九時五十三分【宗谷本線・特急スーパー宗谷1号・グリーン車】稚内着・
十三時二十八分（着後、観光タクシーで宗谷岬散策／稚内泊）
【六日目・七日目】稚内発・七時十分【宗谷本線・特急スーパー宗谷2号・グリーン車】
札幌着・十二時〇六分（札幌市内観光）札幌駅発・十七時〇二分【寝台特急北斗星・デュ
エット寝台】上野駅着・（七日目）九時四十一分

現地の下見は三日目から六日目の道内行程に合わせた進行である。二人は翌日早朝の根室本線『特急スーパーおおぞら1号』に乗るため、札幌へ向かった。

新千歳空港と札幌間は『快速エアポート』が結んでいる。都市交通のような軽快な車両だが、内部は二人掛けのシートが対にならび、さながら特急電車の雰囲気だった。

「大前くん、今日の予定は？」

シートを倒した則尾が眠そうな声で聞いた。

「新しいプランの説明がありますから、とりあえず札幌支店に顔を出す予定です」

「大前くんが仕事しているあいだ、ボクは札幌近郊のリサーチでもしようかな。今夜の宿泊はKホテルだったよね。夕の六時ごろには行くから、そのあと夕飯を食おう」

それだけというと一分もしないうちにイビキをかきはじめた。

札幌支店でのミーティングのあと、前回もお世話になった菅原支店長が、夕食をこ馳走してくれることになった。

則尾の携帯電話にそのことを伝えると、「そりゃあいいや。じゃあ支店に直接行くよ！」と嬉しそうな声が返ってくる。声の背後で人がざわめいていた。

還暦を来年に控えた支店長は生粋の道産子である。夕刻、支店に来た則尾が今回の紀行文のライターと知り、市内の割烹に向かう車中でさかんに北海道の自慢話をした。その熱弁には、紀行文を少しでもよく書いてほしいという切実な思いがこもっている。支店長の自慢話は、割烹料理店の個室に通され、生ビールで乾杯するまでずっと続いた。

やがて支店長お薦めの船盛りが運ばれる。漆塗りの船形容器に盛られた刺身に、「こりやあすごい！」と感嘆した則尾は、満面に笑みをたたえながら支店長を見た。

「ところで菅原さんは北嶺観光開発のMPFとVVのことは詳しいですか？」

突然の質問に、「へえ？」とまぬけな反応を示した菅原支店長は、

「ええ……一応は旅行業界に身をおいてますから」

「あそこの運営は採算ベースに乗ってるんですかね？」

「いや、北海道のテーマパークは、あそこに限らずどこも赤字ですよ。それは北海道に限ったことじゃないっしょ？ 東京デイズニリーゾート以外は全部赤字ですよ」

「北嶺観光開発はテーマパーク運営だけじゃなくて、北海道の広いエリアの農牧地を借り上げているって聞いたんですけど」

「米やトウキビなどの品種を改良して栽培しているって噂は聞きますけど、規模までは……あ、どうぞ刺身を食べてください。旬の魚ですから旨いですよ」

愛想笑いで料理を勧めた支店長はすぐに真顔に戻った。

「それより則尾さん、あのテーマパークには妙な噂があるんですよ。私はあの施設がある岩見沢の近くに住んでますが、あそこができたときに地元への人材募集がなかったんです。ふつう大規模なテーマパークができれば、その地域の雇用が生まれ、地元も潤うもんです……私が聞いたところじゃ、百人近い従業員がいるはずですけど、全員がよそ者らしいですね。みんな施設内の寮暮らしで地域とのつきあひもほとんどないようです」

「変ですね。ボクも今日の昼間、あの施設へ行ってみたんですけど、従業員に米やトウモロコシの栽培のことを聞こうとしたら、妙によそよそしい態度をとられました。どうも聞かれないことのようなですね」

すると支店長はテーブルに身を乗り出し、

「じつは私の従兄弟が、あの施設のボイラーメンテナンスを請け負っている会社にいますね。その従兄弟から聞いたんですが、あそこの従業員は在日の二世や三世の人が多くみえないんだわ。親しくなった従業員がほろっと漏らしたそうですよ」

「在日というと在日韓国人や在日朝鮮人ですか？」

「そのへんまではわかりませんが」

「そうですか……」

思案顔で刺身を口に入れた則尾は思いついたように話題を変えた。

「ところで菅原さんは、石狩港の近くにある北条エナジーの工場のこと知ってますか？」
その質問に支店長の箸がとまる。

「名前ぐらいは知ってますが、詳しいことは……でも支店のスタッフで石狩市に住んでいる者がおりますから聞いてみましょうか？」

「え？ そりゃあラッキーだな、ぜひお願いします！」

ちよこんと頭をさげた則尾は、嬉しそうに雅人を振り返った。

「やっぱり地元にはいい情報が転がってるね。ボクなんかが現地へ行っても、外から建物を見ることぐらいしかできないからね」

「則尾さん、石狩港にも行ってきたんですか？」

「うん、北嶺観光開発も北条エナジーの石狩精製所も札幌から車で一時間以内さ。あれからレンタカーを借りて行ったんだ」

「市内リサーチじゃなかったんですか？」

「おんなじようなもんさ」

「則尾さん、北海道へ来たのは下見と取材のためですからね、お願いしますよ」

「ははは、わかってるよ」

則尾は屈託なく笑い、白身魚の刺身をほおぼった。

翌朝、アルコールが残る頭で札幌駅に行くと、すでに『特急スーパーおおぞら1号』は根室線のホームに入線していた。

札幌と釧路を約三時間半で結ぶ特急列車は、北海道プランの目玉のひとつである。『おおぞら』の名前どおり、先頭車両突端のブルーを基調に大自然の緑と、丹頂鶴の赤をあしらったカラーリングの車両は、滑るようにホームを離れた。

グリーン車のシートは、片側が2席、もう片側が一席の3席配列である。それぞれに電動リクライニングやレッグレストが装備され、国際線のビジネスクラスを思わせる豪華さで、制御付き振り子式車両の乗り心地は『ゆったりと横になって北海道の大地の移動をお楽しみください』といわんばかりの快適さだった。

「こりゃあいいや。こんな列車で旅ができるなんて最高のプランじゃないか！」
則尾は初めて列車に乗った子供のように電動リクライニングで遊んだ。

根室本線は、前日の快速エアポートと同じ軌道を南千歳駅まで走り、そこから内陸の夕張方面へと分岐する。南千歳駅を出るとすぐに日高山脈の深い森が迫り、新夕張駅から先は山脈を貫く軌道になる。前回の下見でも反対の帯広面から乗った路線だが、車窓を流れる山肌の緑は確実に濃くなっていた。

則尾は、昨夜の念押しがきいているためか事件の話題には触れず、ぼんやりと車窓を眺め、「ほら！あの谷の風景、すごいよ！」などとはしゃいでいる。アルコールが抜けきらない雅人は、夢うつに曖昧な返事を繰り返した。

帯広駅が近づくにつれて北海道らしい牧畜風景が広がり始める。ノンビリと草を食む乳牛の姿や、巨大なポプラ並木に囲まれた赤屋根のサイロの風景が続き、北海道の大地を走っている実感が心に満ちていく。

帯広駅を出ると十勝平野の遠望が車窓を流れる。ヨーロッパの田舎を彷彿とさせる牧歌的な風景を楽しみながら数十分、列車は再び濃緑の山間や荒れた牧草地に入った。やがて終点の釧路駅での乗換案内が車内に響くころ、右手の視界に煌々海が現れた。

「海ですね、オホーツク海ですか？」

雅人は陽光の目映さに目を細めた。則尾がだるそうな声で応える。

「まだ太平洋さ。寒流の冷たい海だよ。釧路などで霧が発生する原因は、あの寒流と温暖な大気との温度差なんだ。釧路から根室にむかう海べりに霧多布なんて地名もあるけど、五年ぐらい前の夏だったかな、釧路の先の厚岸から海沿いの道道を車で走ったことがあるけど、霧多布の海で海面から霧が発生しているところを見たよ」

「またあ、話をつくっているでしょう」

「つくってないさ。信じられないかもしれないけど、本当に海面から霧が湧いてるんだ」

「へえ〜不思議な光景なんでしょうね。海の神秘ってところですか？」
すると則尾は声のトーンを落とし、

「海で思い出したんだけど、死の海っていうメッセージさあ……」

「法度の話題のためか、ためらいが滲んでいる。」

「則尾さん、遠慮しなくていいですよ。本音をいえばオレも気になってるんです」

「そうか」と安堵した則尾は、

「STBの竹崎女史も調べたらしいけどさ、あれからボクもネットで検索してみたんだ」
「なにかわかりましたか？」

「3大秘湖っていう発想はとりあえずおいておくとして、死んだ海っていう言葉での検索ではたいした発見はなかったよ。だから角度を変えて考えてみたんだ」

「変えるって？」

「シノウミのとらえかたさ。ボクらは勝手に漢字をあてはめているけど、そのあとに続く言葉はコイだよ。これを命令形の『来い』と考えたら、かなりピンポイントの場所を暗示しているわけだ。死の海っていう漠然とした概念じゃ、来いって言葉が曖昧になっちゃう。

仮に公害で有名な八代海や富山湾、それに東京湾としても、あまりにエリアが広くて漠然としているし、中国の渤海やタクラマカン砂漠だとしても同じことだ」

「でもネットにはその程度しか出ていないんでしよう？」

「だからシノウミって言葉を違う言葉に置き換えてみたらって考えたのさ」

「どんな言葉に置き換えるんですか？」

「シノとウミをわけて考えてみるとバリエーションが広がるんだ。いいかい…」

おっくうに立った則尾は荷台からバッグを降ろし、ノートパソコンを出そうとした。

「これからパソコンですか？ もうすぐ釧路へ着きますよ」

「そうか…じゃあ続きはノサップ号に乗ってからだな」

則尾は出しかけたパソコンをしぶしぶバッグにしまった。

釧路駅では隣のホームで一両編成の快足ノサップ号が待っていた。

くすんだ銀色のボディに褪せた赤色のラインが入った素朴な車両だった。ローカル線と違ってしまえばそれまでだが、長いホームにぼつんとある姿には、厳寒の地で黙々と生きる老人のような孤高さと朴訥さが漂っている。

釧路より以東は、雅人にとって初めての土地である。特急の豪華な車両から乗り換えたせいか、ディーゼル車両の年季が入った床やシート、あるいは錆びかけた旧式の窓枠などそこかしこに、さいはての地へ向かうという侘しさが漂っている。

ディーゼル特有の振動音が高まり、老いた体に鞭打つような軋み音とともに車両がホームを離れた瞬間、雅人の意識には、ふいに救いような心細さがよぎった。

釧路市街地を抜けたディーゼル車は、熊笹の荒地や牧草地が広がる大地を、まるで観光電車のようにゆっくりと進んだ。中央付近の席に陣取った則尾はパソコンのことも忘れ、小刻みに振動する車両の乗り心地と、道東の寂れた風景を楽しんでいた。

やがて人家がまばらになり、太平洋と熊笹しか見えない、呆れるぐらい単調な荒地地の光景が続きはじめる。初夏の陽射を映じ、海面も熊笹の荒地地も安穏と輝いていた。

思い出したようにパソコンを開いた則尾は膝の上でキーボードを操作した。

「ほら、これだよ」

彼が示した画面には、『志野』『滋野』『篠』などの文字がならんでいる。

「シノっていうワードは、ざっと考えただけでもこれだけある。それで、この漢字に海をつけて検索すると……」

則尾は携帯電話用の通信モデムをセットし、エクスプローラをクリックした。

「ありやあだめだ、圏外だよ」

「沿線の風景をゆつくり楽しみめつていう神さまのお達しですよ」

「そうかもね。ネット検索は根室に着いてからにしよう」

厚岸駅を出ると右手に広い湖が広がった。「厚岸湖だよ」と則尾がつぶやく。その湖が背後に去ると、繁茂する雑草のあいだを澄んだ水がとうとうと流れる川浴いになった。人家が姿を消し、川面をうめた葦のような植物群生が線路のきわまで迫っている。

「ここから内陸にかけての根釧台地こんせんには別寒辺牛湿原べっかんべうしっていう湿原が広がっているんだ」「ベツカンベウシ?」

「ベツカンベはアイヌ語で水草の菱ひし、ウシは『たくさんある場所』の意味。つまり菱がたくさんある場所というアイヌ語地名だよ。釧路湿原の半分ぐらいの大きさだけど、ラムサール条約にも登録されているし、釧路湿原よりも自然が残っていて一見の価値はあるよ」やがて湿原を離れた線路は広大な荒地を一直線に貫きはじめた。十勝平野の牧歌的な風景とは異なり、極寒の大地がすべての人工物を荒廃させてしまったかのような光景だった。「エゾジカだ!」

則尾が指差す向には牧草地の土手を駆け上がるシカの群れがいた。

釧路からおよそ二時間、道東の風土をたつぷり味わいながら到着した根室駅は、終着駅だというのに地の小さな駅を思わせる平屋の駅舎だった。閑散としたホームの最後尾には『日本最東端の駅』と書かれた白いボードがあり、さいはての地に来たという感慨がジワつと心の底へにじんだ。

駅前広場にも高い建物はない。閑散とした商店街の上に六月の空が果てしなく広がり、そこから吹きおろす風がヒヤリと頬をなでた。

二人は駅前でタクシーをひろい、低木と熊笹だけの荒涼とした台地の道を、納沙布岬のさつぷしまで走った。

納沙布岬は、『さいはて』のイメージとはほど遠い、明るい光があふれていた。日本最東端のモニュメントがある芝地に立った則尾は、目を細め、水平線に雲を携えた海を見ながらつぶやいた。

「ほら、あそこに島のようなものが見えるだろう? あれは貝殻島かいがらだよ。その後ろにちよこつと見える影のようなのが歯舞諸島の水晶島だ」

「問題になっている北四島ですか?」

「そのひとつだよ……でもさ、こんなに穏やかで明るいのに、この海が領土問題を抱えているって思うと、妙な緊張感があるね」

「本当ですね。オレも北四島がこんなに近いとは思いませんでした……」

「百聞は一見にしかず……つてね」

緊張感をぬぐうように陽気な顔をした則尾は、「そろそろ行こうか」ときびすを返し、待たせてあるタクシーに向かって歩きはじめた。

納沙布岬から根室内内に引き返した二人は、市内の観光協会や観光タクシー会社を表敬訪問した。予定の行動を終え、根室駅へ戻ったのは午後三時を少しまわった時刻だった。この時刻でも、夏至を控えた太陽は、まるで衰えることを忘れたかのように真上からの強烈な光を日本最東端の街に注いでいる。

「釧路行にはまだ時間があるな……ちよつと遅くなっただけ昼飯でも食っておこうかな」

独り言のようにつぶやいた則尾は、ふいに「カニは好き？」と意味ありげな目を向けた。

「ええ好きですよ」

「バツチリだな。それじゃあ花咲ガニを食いに行こう！」

「ちよっと待ってください。シノウミの検索はどうするんですか？」

「そんなの釧路のホテルでもいいよ。ここに来たら花咲ガニを食わなけりゃ話にならない。すぐ先にカニ市場っていう通りがあるから、そこへ行こう。ほら、今回は旅行の下見だろう？ グルメ情報の収集も大事な仕事だよ」

則尾が案内した街路には、寒風で傷んだ漁師小屋のような板張りの店舗が軒を連ね、『カニ』と書かれた素朴な看板を掲げていた。店頭の木製台にはトゲトゲの甲羅をした真つ赤なカニがぎっしりならんでいる。

「花咲ガニは、カニって呼ばれているけど、じつはヤドカリの仲間なんだ。旬にはちよつと早いけど、もうだいぶ出ているな」

目についた店で花咲ガニを買った則尾は、食べやすいようにカットしてもらい、店先の粗末なテーブルに包装紙を広げた。

「さあ食おう！」

勧められて口にした花咲ガニの身は、これまで味わったことのない濃厚な味だった。

「旨いだらう？」

大きなハサミの身をかじりながら則尾が微笑む。

「たしかに旨いですね」

「この花咲ガニは希少種だから、漁は夏から九月ぐらいまでに規制されているんだ」

「え！？ じゃあこのカニは？」

「冷凍モノか、そうでないけりゃあ密漁モノだ。ロシア領内の海域で獲ってくるのさ」

「ヤバイんじゃないですか？」

「ヤバイさ。ほら、この前もロシア海軍に拿捕された漁船のニュースがあっただらう？ それにさ、タクシーで市内を走っているときに気がつかなかったかい？ 店の看板なんかにロシア語が併記されたじゃないか」

「あのアルファベットはロシア語だったんですか」

「うん、根室にはロシア人がけっこう入ってきてるんだ。そういった連中のなかにはロシアンマフィアの人間もいるらしい」

「マジで？」

「マジさ。今のロシア経済を牛耳っているのはマフィアだよ。政府と結託して、なかば公然とビジネスをしているのさ。根室にも多いけど北海道全域に入り込んでいるみたいだな。それにロシア製のトカレフも簡単に手に入るらしい。ほら、あいつらだつてトカレフぐらいは持つてるかもよ」

則尾は雅人の斜め背後を目で指した。目線の先では三人の白人男が大声で話しながら店をひやかしている。Ｔシャツから出た太い二の腕には幾何学模様のタトゥーがびっしり刻まれ、見るからにガラが悪そうである。

「ここはね、のどかで荒涼としたさいはての地であると同時に、ロシアと深く接触するゲートウェイなんだ」

則尾の話を聞きいているうちに、雅人の心にやりきれない思いが込み上げてきた。それ

は街路を吹き抜ける海風のように薄ら寒い感触だった。

(2)

釧路に戻り、予約したホテルに入ったのは十時に近い時刻だった。

部屋に入るなり、則尾は福田の携帯電話を呼び出し、札幌支店長から聞いた話を伝えた。

「北嶺観光開発の社員のことは福田が調べてみるってさ」

電話を切った則尾はノートパソコンの電源を入れた。

「最近のホテルは部屋にネット回線を備えているから助かるよ」

パチパチとキーボードをたたき、ノサップ号のときと同じワードを打ち出す。

「シノって字はざっと変換してもこれだけある。このうち志野、滋野などに海をつけても、

せいぜい人名ぐらいで、それらしいサイトはヒットしない。ところが篠という字だと……」

インターネットエクスペローラーを立ちあげ、『篠海』と打ちこみ、検索を押す。則尾が

使っているYahooの最初の画面に、『篠海しのつみの青椿堂』というサイト名があった。

「これこれ」

クリック操作で現われたのは、東伊豆・城ヶ崎海岸じょうがさきの蓮着寺れんぢやくにある『篠海しのつみの青椿堂』を紹介する画面だった。

「青い椿あおいつばきの堂どうと書いて『せつちんどう』と読むんだ。せつちん……つまりトイレだよ。この寺の周辺が藪椿やぶつばきの群生地ぐんせいぢでさ、雪ゆきに隠すと書く雪隠せっちんに代えたお洒落なネーミングだ」

「便所べんじょですかあ？」

「でもポイントになる建物だ。写真を見ても純和風の建物で立派じゃないか。それに、これだけじゃなくて……」

ふたたび検索画面に戻って別のサイトをクリックする。

「篠海しのつみの青椿堂せいしんどうのほかにも、篠海灯明台しのつみとうというのもあるんだ」

現われたサイトは、東伊豆にある城ヶ崎海岸の遊歩道を紹介するホームページだった。

「篠海は、鎌倉時代に日蓮上人にちれんが流罪された場所らしい。それにちなんで建てられたのが、日蓮が着くと書いて蓮着寺。青椿堂も灯明台もみんな蓮着寺に関連した施設だ」

「日蓮は法華経の宗祖でしょう？　つまり宗教に関係したメッセージってことですか？」

「断定はできないけど、東京に戻ったら、すぐに青椿堂と灯明台へ行ってみようと思ってる。大前くんも一緒に行く？」

「土曜か日曜であればOKですよ」

「じゃあ戻った翌週の土日のどちらかにしようか」

「戻るのが今週の土曜だから……翌日の日曜でもいいですよ」

しかし則尾は「いやあ」と煮え切らない表情で、

「じつはさ、この下見のあと、ボクは二、三日こつちに残ってリサーチしようと思ってるんだ……だから伊豆行きは翌週の土曜か日曜にしよう」

「え〜!?　オレと一緒に帰らないんですか？」

「せっかく北海道へ来たんだから二、三日は好きに使わせてくれよ」

「なにを調べるんですか？」

「え？　そりゃあ……今回の紀行文に関する事に決まってるじゃない」

「怪しいなあ、2つの会社のことを調べるんじゃないですか？」

「まあ、仕事が優先だけ……」

どきまぎとといった則尾は、とってつけたように表情を輝かせ、

「そうだ、伊豆へ行くとき例のSTBの企画室長も誘ったら？」

「どうして彼女を誘うんですか？」

「カシオペアの車内で死んだ女性は彼女が案内した女性だろう？ 彼女だってダイニング

メッセージの謎を真剣に考えているみたいだし、きっと喜ぶよ」

脳裏に七海の表情が浮かぶ。

「彼女、行きますかねえ」

「絶対に行くさ。もし彼女が都合悪かったら結城さんを連れて行けばいいじゃない」

「ミュウちゃんを？」

「彼女もキミのことを憎からず思っているんじゃないの？」

「へんな想像しないでくださいよ」

「いやいや。結城さん……ミュウちゃんだっけ？ 彼女はキミに気があるよ。ちえ、羨ましいなあ。パリキヤリアの美女とキュートなミュウちゃんの両手に花かあ！」

「やめてくださいよ」

則尾の話術にはまったようで癪にさわったが、脳裏に浮かぶ竹崎七海の知的な面差しは、無性に心地よかった。

翌日は、釧路駅を九時五分に発車する『快速しれとこ』で網走あはしりに向かった。

釧網線せんもうは、道東南部の釧路湿原国立公園、道東内陸の阿寒国立公園、オホーツク海沿岸の網走国定公園と3つの国立・国定公園を貫く総延長169kmの路線である。北海道でも最高の車窓景観が広がる路線として人気が高い。

「大前くん、釧網線の列車って上り下りの表示が変だと思わない？」

則尾は駅構内の時刻表を見上げた。

「え？ どうしてですか？」

「釧網線の起点は東釧路駅なのに、網走に向かう列車が上りになっているじゃないか」

「本当だ。どうしてですか？」

「諸説あってボクも詳しくは知らないけど、初期の釧網線は網走本線の一部で、そのころは網走が起点だったらしいけど、そのなごりじゃないかな」

前日のノサップ号と同じように、くすんだシルバーの車体に赤のラインが入った一両編成の快速しれとこ号は、平日にもかかわらず四列座席の九割程度が観光客でうまっている。雅人たちが乗り込むのを待っていたように、ディーゼルの唸り音と振動が高まり、小さな車両は釧路駅を発車した。

釧路駅からしばらくは釧路湿原東端の雄大な眺望のなかを一直線に快走する。

「冬、だったら丹頂鶴たんちょうづるが見られるんだけどなあ」

半開きの窓枠に両手をかけた則尾は、吹き込む湿原の風に長髪を揺らし、うっとりしたように外の景色に見入っていた。

ゆつたりと蛇行する釧路川の流れや陽光に輝くシラルトロ湖・塘路湖とうろこなどが次々に車窓をよぎる。目に入る風景のすがしつとりと濡れているように感じられた。

湿原の眺望が背後に消えると、軌道は阿寒国立公園の内陸山岳地へと入り込んだ。この

エリアには摩周湖や屈斜路湖など道東内陸部の観光スポットが点在している。停車駅も摩周駅や川湯温泉駅など、かつて雅人も訪れたことがある観光地名が続く。しかし、車窓には単調な平原や森、そして広大な牧草地などの風景が流れるばかりだった。

川湯温泉駅のひとつ先の緑駅を過ぎると、その名の通り、空気が緑色に染まったと錯覚するほど密集した木々が車窓に迫り、線路も深い森の起伏をうねりはじめた。開放された窓から初夏とは思えない冷気が忍び込み、半ソデの肌を冷やした。

やがて車両はゆるい下り勾配に入り、森が次第に遠のきはじめる。車輪を軋ませながら三十分ほど下った先には、ため息が出るほど広大な畑作地のパノラマが待っていた。直線的に続く防風林で区切られた畑では、麦の穂が青々とした波を描き、はるか後には雪を残した連山の峰が霞んでいる。

「けっこう高い山だなあ、まだあんなに雪が残っている……」

雅人のつぶやきに則尾が応える。

「斜里岳さ。あの連山は知床半島にまで続いているんだ。それにしてもめちゃくちゃ広いなあ。北海道じゅうのジャガイモや小麦やビートがここで穫れるっていわれたら信じちゃうよね。北嶺観光開発はこのあたりにも進出してるのかな？」

「こんな豊かな所に、耕作放棄地や遊休農地なんてあるんですか？」

見わたす限り続く畑作の平原を見ていると耕作放棄地という言葉が空疎に響く。

「どの農家も後継者不足は深刻だからね」

則尾がニコッと雅人を見たとき、知床斜里駅への到着アナウンスが流れた。

知床斜里駅からは網走国定公園へと入る。畑作地をしばらく走ると右手に海が広がった。

「オホーツク海ですよね」

雅人が声をかけると、

「うん、真冬には流水が見られる海だよ、ボクもまだ見たことはないけどね……海か……」

「きつと凍てつく神秘的な海なんでしょうね」

「たぶんね……」

則尾はうなずいたきり黙ってしまった。

流水の映像はテレビなどで見たことはある。しかし車窓から望む六月のオホーツク海は、流水が漂う厳寒の映像記憶とは重ならず、安穏とした温暖な海にさえ見える。ただ、水平線のあたりに淀む深いブルーの色と、線路と道路以外にはなにもない物悲しいような光景だけが、この地の寒冷さを彷彿とさせるばかりだった。しかし十数分も走ると、その茫漠とした視界に黄色やオレンジの色が見えはじめ、やがて暖色系の花が大地をうめつくした。

「大前くん、四季観光産業って琵琶湖の近くが発祥だよね」

小清水原生花園のまっただなかを走っているとき、則尾の声が聞こえた。原生花園の背後には涛沸湖の湖面が蜃気楼のように煌めいている。ぼんやり外を見ていた雅人は、一瞬間に聞かれたのかわからなかった。

「え？ なんですか？」

「四季観光産業の発祥地さ。旅行業界のキミだったら知ってるかと思って」

ようやく脳細胞が働きはじめる。

「そうですねえ、現在の本社は東京にありますけど、もともとは彦根市あたりを中心にしたホテルチェーンだったって聞いたことがあります」

「そうだよな、近江ホテルチェーンって名前も琵琶湖の古名に由来してるんだしね」
嬉しそうにうなずいた則尾はパソコンを取り出して通信モデムをセットした。

「こんなところで電波がつながるんですか？」
「見通しがいいからなんとかいけそうだ」

則尾はしばらくネットを検索していたが、やがて雅人の膝を軽くたたき、パソコンの画面を向けた。画面は琵琶湖の鯉ヘルペスのサイトだった。

「鯉ヘルペスですか？」

「うん、琵琶湖の鯉が鯉ヘルペスで大量に死んだっていう情報さ」

「それがどうかしたんですか？」

「死の海だよ。昔から琵琶湖は近江と呼ばれているけど、万葉集などに詠まれる琵琶湖は、淡水の海と書いて淡海なんだ。死の海は、本当の海を指すとは限らないし、鯉が大量に死ねば、まさに死の海じゃないか」

こじつけにも聞こえるが、もしかしたらという微かな期待もある。

「ということは、ダイイングメッセージのコイは魚の鯉のことだったんですかね？」

「あくまで可能性だけだね。とにかく篠海の青椿堂に続いてまたひとつのポイントが見つかったわけだ。それも四季観光産業の発祥地である琵琶湖という関連性もある」

「でも、それがMAフアードとどう関連するんですか？」

「それは……」

言葉に詰まった則尾は肩をそびやかし、「今後の課題かな」と唇をへの字にゆがめた。

岬めぐりプランでは、網走駅での石北本線乗換には約五時間の余裕が設定されている。則尾の提案理由によれば、市街観光はもとより網走刑務所、モヨロ貝塚、北民族記念館などの施設が昼食ついで見ることができ、とくに冬場は流水観光も可能な時間設定ということである。

「とにかく市内をぶらついてみようよ。腹も減ったしね。ホツカイシマエビの旬にはちよつと早いけどホタテなら食えるよ。それに案外と知られてないけど、ここはミンククジラの捕鯨基地でもあるんだ。クジラ料理を食わせる店もあるよ。冬だったらサロマ湖産の牡蠣やキンキっていう魚が絶品なんだけどなあ」

「則尾さん、オレのほうはオブションや観光タクシー、それに流水見物の船なんかのリサーチや折衝がありますからあんまり時間はないですよ」

「じゃあ手っ取り早くタクシーで店を探すか」

則尾は駅前の客待タクシーの運転手に地元の旨い店をたずね、勇んで乗り込んだ。

網走市は雪深い地の小都市を思わせる街並だった。小規模の商店が肩を寄せ合う街路には、雪よけ屋根がせり出し、どこか気だるい空気が漂っている。しかしここが厳寒のさいはてだと意識した瞬間、街路のどこかしこに侘しいようなすき間が見えはじめ、まばらな通行人さえも、自我にこもって黙々と歩いているように見えてくる。タクシーに案内された小さな割烹料理店にも、地元の人が昼飯を楽しむ空間の底に、無表情で寂然とした慎ましさが漂っていた。

昼食をすませ、観光協会や観光タクシー会社への表敬訪問を終えたのは石北本線の特急オホーツク8号が発車する三十分前だった。あわてて駅へ駆けつけると、ホームにはすで

に列車が入っていた。

札幌・網走間を約五時間で結ぶ特急オホーツク号はわずか4両の列車だったが、明るいグレーを基調に緑とラベンダーカラーの線が入った軽快なイメージの車体だった。グリーン車の横3列シートは淡い茶色でコーディネートされ、通路にも同系色の絨毯が敷きつめられている。平日のためかグリーン車には数組の乗客しかいなかった。

網走駅を出ると、しばらくは網走湖が視界を流れる。しかし最初の停車駅である女満別駅から先は原生林の山岳地が延々と続き、車窓を流れる風景がじれったいぐらい遅く感じられた。

「特急のわりにスピードがのろいんですね」

「この路線は最高でも時速六十五キロ程度なんだ。だから旭川まで四時間近くもかかるのさ。でも冬場のこの時間はもう暗いから外の風景もあまり見られないし、釧網線のような景観も少ないから、旭川までゆっくり体を休めながら移動するにはちょうどいいよ」

夏至に近いこの時期でも、北見駅を過ぎるころには薄暮が漂いはじめ、旭川駅への最終停車駅である上川駅のホームでは、古びた蛍光灯の眠たげな明かりが、深い闇にひっそり点っていた。

旭川市街で名物の旭川ラーメンを食べ、ホテルのロビーに入ったとき、則尾の携帯電話が鳴った。フロントでチェックインの手続きをする雅人の耳に、「あさつての午後四時に千歳空港で……」という断片的な声が聞こえる。

「則尾さん、あさつての空港で誰かと会うんですか？」

エレベーターのなかで雅人は聞いた。

「聞こえた？」

「その部分だけですけど」

「福田だよ。あさつての午後の便で北海道に来るんだ」

「誘拐事件になにか進展があったんですか？」

「いや、そっちの動きはないようだ」

「でも福田さんが来るのは北嶺観光開発や石狩精製所を調べるためでしょう？」

エレベーターを降りた雅人はキーナンバーの扉をあけた。

「それもあるけどね……お、わりといい部屋じゃん！」

則尾はツインの奥のベッドに荷物を投げ、窓から市街の夜景を眺めた。

「則尾さんがこっちに残るのは紀行文のリサーチじゃなかったんですか？」

「えっ？」と振り返った則尾は苦笑いをこぼした。

「もちろん、それがメインさ」

「怪しいもんですね」

「でもこの旅行プランは、北海道に着いた日は札幌で一泊するし、最終日も帰りの北斗星の時間まで札幌で五時間近くも時間があるんだよ。札幌近郊で少しでも多くのオプションプランを用意しておいたほうがいいだろう？」

「またあ、そんなこといって……中年探偵団の中心人物が二人で北海道にいるんだから、事件のリサーチが目的なんじゃない？」

「旅行のリサーチもバッチリするさ。そうだ、大前くん帰りの飛行機は午後七時ぐらいだろう？ 福田は午後四時前に千歳へ着くから、空港で福田に会えるじゃないか。大前くん

も中年探偵団の臨時メンバーなんだから、少し早く空港へ行って福田の話を書かない？」

「まあ……コーヒーぐらいいはつきあってもいいですけどね」

本音をいえば雅人も福田の話に興味があった。この下見のあいだ、テレビや新聞はほとんど見ていない。3大秘湖での事件もそうだがカシオペア車内で死んだ陳ミラー淑美の事件、そして長嶺社長の誘拐事件などに関してブラックジャーナリズムにどのような情報が流れているのか……これまでの自分の人生では想像すらできなかった社会の裏側への好奇心が心の奥で疼いていた。

最終日の目的地は最北の地・稚内^{わっかない}である。

二人は朝九時五十三分に釧路駅を出る宗谷本線の特急スーパー宗谷1号に乗った。札幌と稚内を五時間弱で結ぶ特急スーパー宗谷は、先頭と最後尾が深いブルーに塗られた車両で、一昨日のスーパーおおぞらと同じような印象を受けた。しかしグリーン車は先頭車両の一部が仕切られただけでシートも九席しかない。

「これだけしか席がないんですかあ」

思わずもらした不満に、則尾はニヤニヤしながら返した。

「だから特別待遇って感じがするだろう？ ほら、シートごとにテーブルもついているから、パソコンだって使えるしね」

「フルムーンのお客さんはパソコンなんか持ってこないですよ」

無然として則尾の隣に腰をおろす。座り心地は思ったよりソフトで優しかった。

日本最北端へとひたすら北上する特急スーパー宗谷1号は、前日のオホーツク号に比べ、特急らしい速度で街中や牧草地帯を快走した。最初の停車駅・和寒^{わっさむ}駅までの通過駅は、過疎地の寂れた駅といった印象だったが、それから先は、閑散とした空間に小さな駅舎があるだけの無人駅が目立ちはじめた。三つ目の停車駅である名寄^{なよち}駅の案内が社内には流れはじめたとき、雅人の携帯電話が鳴った。

《会社からかな？》

ポケットの携帯画面を見た瞬間、『竹崎携帯』の文字に心臓が高鳴った。あわてて席を立ち、グリーン車両の先頭デッキへ走る。

「はい、大前です！」

——あ、大前さん、竹崎です。仕事中すみません。

七海の声が心地よく鼓膜を震わす。

「大丈夫ですよ。なんででしょうか」

——大前さんのお戻りは明日の土曜日でしたよね？

「ええ、新千歳発が午後七時過ぎだから羽田には九時前には着く予定ですけど」

——忙しくて大変ですね。

「でも新千歳には午後四時前には着く予定なんです。ちょっとヤボ用がありました……」

——そうですね……じつは直接お会いして話したいことがあるんですけど、大前さんが羽田へ戻る時間に、空港まで行ってもよろしいでしょうか？

「ええ、かまいませんけど……なにかあったんですか？」

——先ほど姉が帰国したんです。それでカシオペアの事件のことを話したんですけど……。「お姉さんから新しい情報があったんですか？」

——詳しいことは羽田でお会いしたときに話します。大前さんのほうは北海道でなにかわかったこと、ありましたか？

「ありましたよ。死の海の謎が解けそうなんです」

——え！？ 本当？

「一緒に下見に来た旅行作家が発見したんです。会ったときに詳しく話しますが、死の海は、死んだ海じゃなくて、シノという部分を竹カンムリの篠という字にしてみました。そしたら篠海っていう名前がついた東伊豆の施設がヒットしたんです」

——すごい！

七海は感歎の声をあげた。

「いやあ、それほどでもないですよ。それで東京に戻ったら来週の土日のどちらかでその施設に行ってみようと思ってるんですけど……」

《一緒に行きませんか？》という誘いができず、言葉を飲みこんだ雅人に、女神が囁いた。

——もしご迷惑でなかったら、私も連れていってくれませんか？

「大丈夫ですか！？」

——はい、来週の土日は予定が入っていませんから、どちらでも大丈夫ですけど……ご一緒してよろしいんですか？

「もちろん！ 一緒に行きましょう！ どっちの日にするか決まったら連絡します」

——お願いします。それじゃあ明日、羽田でお待ちしています。

「わかりました！」

ふわふわと車内を舞うような気分で席に戻ると、則尾が怪訝な面持ちで迎えた。

「どうしたの？ やけに嬉しそうだね」

「竹崎さんからの連絡でした。彼女、伊豆へ一緒に行くそうですよ」

「だろ？ いったとおりにじゃない。ちえ、聞くんじゃなかったよ」

ふてくされたように顔をしかめる則尾の背後で名寄市の街なみが流れていた。

名寄駅から先の通過駅は、広大な牧草地や水田の一角、あるいは深い森の空き地などに、ほったて小屋のような駅舎がぼつんと取り残されたような無人駅ばかりで、砂利を敷いただけのホームには雑草がはびこり、板を並べたホームは厳冬の風雪に痛められ、はたして乗降客がいるのだろうかと素朴な疑問さえ抱いてしまう。そんな荒涼とした侘びしい光景と、列車の快適な乗り心地が不思議とミスマッチし、雅人はタイムマシンで過去へさかのぼっているような感覚さえ抱いた。

やがて天塩川の流れや、荒涼とした大地など、に囲まれた狭い軌道を悠然と走った列車は、牧草地と水田だけが延々と続く大地に出た。

「大前くんは、このあたりに来たことある？」

豊富駅へ停車したとき、則尾が物憂げに聞いてきた。

「いえ、旭川から北は初めてです」

「そうか……ボクは2回来たことがあるよ。2回とも車だったけどね。そのときこの近くにある豊富温泉に泊まったんだ。石油採掘で偶然に噴出した温泉だけど、日本最北端の温泉郷だよ。お湯がちよっと石油臭かったけどけっこうオツな温泉だったな」

「それじゃあ豊富温泉に宿泊するオプションもありですね」

「そうだね。稚内市からもそれほど離れてないしね」

豊富駅から先のレールは呆れるほど一直線に原野を貫いていた。

「サロベツ原野だよ。一度だけ原野の遊歩道を歩いたことがあるけど、なんにもない草だけの湿地だ」

サロベツ原野は、人間の息づきを感じられない広漠とした酷寒の大地をイメージさせる。しかし七海の声を鼓膜の片隅に残した雅人の心は妙に温かかった。

終着の稚内駅は、低層の商店に囲まれた簡素な建物だった。薄暗い構内から駅前に出た瞬間、強烈な陽光が露出した肌を刺し、目頭が疼いた。しかし、漂う微風は爽やかな涼気を含み、列車のシートで汗ばんだ背中を心地よく冷やしてくれた。

「宗谷岬はここから三十キロぐらい離れているし、バス便が一日4本程度しかないから観光タクシーが便利なんだ。それと、ここでは一泊するプランだから、レンタカーで周辺を観光するオプションも用意したほうがいいな。とりあえずは昼飯を食わないか？ 近くに旨いカニ丼を食わせる店があるんだ」

大きな伸びをした則尾は、どっこいしよと大仰な声をあげてバッグを背負った。

タラバガニの身がどっさり盛られたカニ丼で腹を満たしたあと、二人はタクシーで宗谷岬へ向かった。海に沿った道を約三十分、到着した宗谷岬の駐車場には、まばらな乗用車を圧するように4台の大型観光バスが並び、オホーツク海を見据えるように建てられた間宮林蔵の像の周囲には、熟年層の観光客がたむろしていた。そこから少し海側の、鋭角な三角形を描く宗谷岬のモニュメントのはるか後、冷たそうな藍色の水平線に青い塊のような陸地が、空に溶けこみそうに霞んでいる。

「あの陸地はサハリン……かつての樺太だよ。ロシアがあんな近くに見えるんだ」
海風と観光客の声にまじって則尾の声が聞こえた。

「ほんとに近いんですね」

「こんなに狭い海が国境なのさ。だから稚内にはロシア人が気軽にやって来る」
その言葉どおり、宗谷岬から戻って市内を散策すると、ロシア語が併記された店舗看板や建物標識が多く、ここが国境の街だと思わずにはいられない。それをさらに感じたのは、観光協会や観光タクシー会社との折衝をすませ、夕食をとろうと入ったレストランだった。ほとんどの席が白人に占領され、意味不明なロシア語が飛びかっていたのである。

店内を一瞥した則尾は、雅人に顔を寄せた。

「な、多いだろう？」

「フルムーンの熟高年夫婦が街をうろついても大丈夫ですかね？」

「めったなことはないと思うけど……事前に注意はしといたほうがいいかもね」

「どんな注意ですか？」

「まあ……節度をもって行動しましょう、てな感じ？ でも考えようによつては、根室も稚内も国境が肌で感じられる街だから、それなりに味わいも深いんじゃないのかなあ」

「いえてますね。3大秘湖よりこのプランのほうが列車をフルに使えるし、北海道のいろんな景色が堪能できるから、今回の事件は返っていい結果を生んだのかもしれないね」

「神の啓示ってところかな。でも神さまは気まぐれだから、どうなることやら」

「やなこといわないでくださいよ」

「旅行プランのことじゃなくて事件のことだよ」

目を細めた則尾が小声でいったとき注文した海鮮料理が運ばれてきた。透明な赤色のイクラと、まったりしたオレンジ色のウニが新鮮な暖色系の色相を描き、そのまわりを囲んだイカの刺身が艶々と輝いている。

「白銀に咲く原生花園の花々ってイメージだ。北の海鮮は旨いものが多いから、今回のプランではグルメが最高のオプシオンになるかもしれないよ」

「そうですね。グルメ情報は充実させたほうがいいですね」

大量のイクラをご飯にのせた則尾が、大口をあけて頬張ったとき、横の席でビールを飲んでいた四人の白人が野太い笑い声をあげた。

(3)

下見の最終日、札幌へ戻る宗谷本線の特急列車は朝七時十分発のスーパー宗谷だった。

「もうすこし余裕ある時間の特急はないんですか？」

朝食もとらず、覚めやらぬ意識のままグリーン車に乗った雅人は思わず愚痴った。

「札幌直通のスーパー宗谷は日に二本しかないから、これを逃すと午後四時までないよ。昼過ぎのサロベツっていう特急もあるんだけど、それだとグリーン車はないし、札幌着が夜の七時過ぎだから、北斗星の出発時刻に間に合わないんだ」

「不便ですね」

「でも、この特急なら札幌着が十二時ごろだから、お土産を買ったり市内見物をしたりする時間があつてちよいどいいんじゃないかな。それに旭川着も十一時前だから、そこから観光タクシーで美瑛や富良野を観光して札幌に行くオプションも組める。もつといえ、この路線の景色は昨日も見ているから、帰路はゆっくり横になって最北の地の余韻や旅情に浸りながら札幌へ戻るのも悪くない」

「余韻や旅情ねえ。それじゃあ我々もそれに浸って帰りましょうか」

「そうそう、旅は余韻と旅情が最高のスパイスってね」

則尾はニヤつとしてシートを倒したが、札幌までの五時間、余韻と旅情はどこへやら、ずつと高イビキをかいていた。

札幌駅へは定刻通りに到着した。支店へのあいさつと昼食をすませ、往路と同じ快速エアポートで新千歳空港に着いたのは午後三時半を少しまわった時刻だった。しばらく展望デッキで時間をつぶし、福田が乗った便の到着時刻に合わせて到着ゲートへ行った。

ゲートから押し出される人波のなか、「よお」と手をあげた福田は、ジーンズに麻のジャケット、そして派手なロゴタグ絵柄が入ったベースボールキャップという姿で、手には小振りのポストンバックを持っていた。

「福田さん、オフィスで会ったときとイメージが違いますね」

雅人は目を丸くしたが、則尾は小馬鹿にした口調で、

「こいつのカジュアルはでたらめさ。だいたいアルマーニのキャップにプラダのバッグだぜ、まるつきり悪趣味な成金ファッションじゃないか」

その嘲りを「適当に選んだ結果さ」と軽くないなした福田は、

「それにしても大前くんがいるとは意外だったな」

「オレの羽田行きの便は七時過ぎですから、それまで福田さんの話を聞こうと思って」

「それじゃあ、とりあえずお茶でも飲もう」

福田は新千歳空港に詳しいとみえ、自らカフェに案内した。

「則尾から報告があった件だが……」

カフェオーレのカップに口をつけた福田は、ぼそつと話しはじめた。

「あれからいろいろ手をまわして調べてみたが、どうも胡散臭い。北嶺観光開発の施設は、在日二世や三世のスタッフを雇用しているようだ。長嶺会長は以前からその面との接触があったという噂も流れている」

則尾がアイスコーヒーの氷をストローでかきまわしながら聞いた。

「なにか理由があるのかな？」

「そこまではわからないが、意図があることはたしかだな」

「そうか……それで長峰会長の誘拐事件のほうはどう？」

「身代金の要求以後は犯人側からの連絡がないようだ。ブラックジャーナリズム連中のあいだでは死亡説まである」

「進展なしか……」

「ただし妙なことがある。オーナーが誘拐された北嶺観光開発だが、ふつうに考えればパニックになっていてもおかしくないのに、相変わらず平常営業を続けているんだ。極秘の事件だから外部に悟られないよう予防線を張っているとも考えられるが……それともうひとつ、長嶺会長の誘拐には中国マフィアが関わっているという憶測がある」

「中国マフィア？」

「北嶺観光開発がM Aファンドの意向で動いていたとしたら、これは米国主導の事業になる。そうなると不快に思うのがロシアと中国だ。中国はチベット問題などでアメリカとの関係がギクシヤクしている。それに東シベリア油田のパイプラインの敷設ルートは中国にとって死活問題だ。もし日本直通のナホトカルトを選択したら米国に利益をさらわれると考えるだろう。そこで中国系マフィアの存在が浮上したってわけだ」

則尾が深いため息をついた。

「中国系マフィアか。それじゃあオクタペ湖やカシオペア車内でM Aファンドの調査員が消された事件も連中の仕業ってことか」

「そう仮定すればな」

「ロシアンマフィアって線はないの？」

「事件の構図としてはその線も考えられるが……そうなるとオンネトーの亀山隆盛と東雲湖の白石琢磨、そのふたつの事件の位置が不明確になる。とくに亀山は親ロシア派、つまり旧ソビエト派で知られた議員だからな」

それを聞いた則尾が「ちえ、やつぱりね」と舌打ちをした。

「福田もあの事件と今度の誘拐事件とを関連つけていたのか……」

「俺を見くびるなよ。親ロシア派の政治家と官僚の事件だけ。自殺やヒグマに殺られたなんて発表を俺が真に受けるわけがないだろう。ブラックジャーナリズムでは親ロシア派の亀山と白石は米国政府によって排除され、その報復としてロシアンマフィアにM Aファンドの人間が消され、長嶺会長が誘拐されたという憶測もあるんだ」

「へえ〜やつぱりね」

「しかし俺としては、その線はないと思う。内政問題を抱えるロシアは、今のところアメ

リカとは事を構えたくないはずだ」

「中国だってアメリカとの国際問題には絡みたくないんじゃないか？」

「短期的に見ればね。しかしその先を見据えたらどうか。あの国は長期的な深謀を得意とする国だから、表立って動けないぶん、裏での動きは熾烈になるはずだ。それと……もし中国系でないとしたらアルカイダの線も考えられる」

「なるほど、米国の利己的な世界支配に対して一番過激に反応する組織だからなあ。それに身代金目当ての要人誘拐もお得意芸だし」

「でもな、今回の事件に関しては中東系のニオイがしないんだ。それに、いくら米国政府が絡んでたにしても、中東問題とはあまりに遠すぎる」

「じゃあ裏で動いているのは中国系のやつらかな……でも米国政府が相手だとかなり厄介な国際問題にもなるし……」

そこまでいった則尾はふいになにかに気づき、

「米国政府って、もしかしたらCIAか？ まさかMAファンドの調査員って……」

福田は則尾を一瞥し、「うん」と小さくうなずいた。

「CIAのアジア要員という線が濃厚だな」

雅人の脳裏にオンネトーで見た女の面影がよみがえる。CIAの名はハリウッド映画や米国ドラマなどで聞いている。『米国の諜報機関』という程度の認識はあったが、オンネトーで見た陳ミラー淑美の清楚な印象とCIAの概念がまるで重ならない。

雅人は思わず身を乗り出した。

「福田さん、カシオペア車内で死んだ女性もCIAなんですか？」

「その可能性が高い。そうなると日本の警察は太刀打ちできないな」

「アメリカの政府機関が日本の事件に関係してるんですか？」

「ははは、あまり知られてないが、かなり関係しているよ。だいぶ以前、米国からの戦闘機輸入に絡んで失脚した首相がいただろう？ ブラックジャーナリズムのあいだでは、あの事件も中国との国交回復を断行した首相の失脚を狙ったCIAの謀略だといわれているんだ。当時の日中接近は米国政府にとってマイナスだったからな」

「信じられない話ですね」

雅人の表情がよほど深刻だったのだろうか、福田は「うん」と低く唸り、

「普通の人には縁のない組織だ。しかし政策レベルでは深く関係している。一般人は気づかないだけだ。それはそれとして……」

言葉をとめた福田は、口をへの字にして雅人を見つめた。

「これは……今回の事件と直接的に関係した情報じゃないが……大前くんが3大秘湖で会った女性の姉、つまり四季ツーリストビューロの社長はどうやら長嶺会長の愛人のようだ。その女社長についてはキミのほう詳しいと思うが、旅行業界では有名な存在らしいね」

「有名ですよ……」

「その女社長もヨーロッパへ出張中ということだ。長嶺会長の誘拐事件は知っているはずなんだが、そんなときに出張っているのも変な話だ」

「でも、きのう帰国しているはずですよ」

「ん？ どうして知ってるんだ？」

「きのう妹さんから聞いたんです」

福田はすぐに「そうか」と勝手に納得し、

「大前くんは妹と直接連絡できる状況にあるってわけだ」

「それほど親しいわけじゃありませんけど……」

雅人はカシオペアの事件以降の出来事をかいつまんで話した。福田は腕組みをして聞いていたが、話が終わるとフーッと肩から力を抜いた。

「まあ……その女社長が今回の事件に関係しているとも思えないし、ましてその妹じゃ、会長の誘拐事件やM Aフアンドの裏事情なんて知るはずないしな。ただし情報ソースに近いことはたしかだからなにか情報が引き出せる可能性はある」

「彼女、そんな情報を持ってますかね」

「ん？」

七海に対する雅人の感情を怪しんだのか、福田は眉間にしわを寄せて雅人を凝視した。すかさず則尾が割り込んだ。

「まあまあ、それほどシビアに考える必要はないよ。うまく情報交換することで、なんかヒントになるような情報が得られるかもしれないってだけのことさ」

「そうですね……」

雅人は福田の視線を避けて顔を伏せた。七海の面影の背後で超大国の政治的な思惑が絡んだ事件の構図が不気味に揺れている。それは非現実な御伽話おとぎばなしのようにも思えるし、七海に襲いかからんとする魍魎おにようの蠢動蠢動のようにも感じられる。

そのとき携帯電話の着メロが鳴った。慌ててポケットから携帯電話を出し、画面を確認した瞬間、雅人は身を硬くした。まるで妄想の底から誘うように『竹崎携帯』の文字が表示されていたからである。

「はい、大前です」

「あ、大前さん。もう新千歳にいます？」

「いますけど、なにかあったんですか？」

「じつは、姉なんですけど……今そちらにいるんです」

「この空港に？」

——北海道に急用ができて午後の便に乗ったんです。さつき着いたと連絡がありました。それで姉が、大前さんと直接お会いして例のカシオペアの件をお聞きしたいということと、とりあえず私から確認の電話を入れさせてもらったんですけど……。

「お姉さんが……」

数年前、業界の会合で見た竹崎由布子ゆふこの妖艶な姿が浮かぶ。

——ご迷惑でなかったら姉と会っていただけませんか？

「でも、こっちには連れがいますけど、いいんですか？」

——同行している旅行作家のかたですか？

「それともう一人……オレたちのアドバイザーみたいな人ですけど」

——でしたら反対にご迷惑かしら。たぶん姉は他のかたがいらしても問題ないとは思いますが、どうぞ。

そのとき横から則尾が小指をつき立てて「これ？」と小声で揶揄やぶした。慌てて携帯電話を手でおおった雅人は、「則尾さん」と諫め、

「STBの竹崎さんからです。お姉さんが今、この空港にいるみたいなんですけど、オレ

と会って話をしたいらしいんです」

「ボクらがいてもいいの？」

「ええ問題ないようですけど」

それを聞いた福田の顔に緊張が走った。

「すぐOKと伝えろ！」

押し殺した声だが有無をいわせぬ迫力があつた。その形相に気圧された雅人は、「お姉さんがよければこっちは大丈夫ですけど」

——じゃあすぐに姉に連絡します。空港のどちらにいらっしやるんですか？

「××というカフェラウンジですけど」

——行くように伝えます。大前さんは姉がおわかりになるかしら？

「ええ存じています」

——それなら大丈夫ですね。

安堵の声を残して電話が切れた。

それから五分もしないで、ラウンジの入口に竹崎由布子が現われた。漆黒のパンタロンスーツに身を包み、ダークブラウンの髪をうしろで軽くゆわえ、繊細なゴールドリングのピアスをつけた姿は、顔を知らない則尾でさえ「あれだろう？」と雅人の肩を小突くほど周囲から浮き立つオーラを放っていた。

立ちあがった雅人に気づいた竹崎由布子は、口もとに笑みを浮かべて歩み寄って来た。

「はじめまして、JITの大前です」

「妹から聞いています。突然こんなことをお願いしてすみません」

真っ赤なルージュの口からハスキーで艶っぽい声もれる。

「いえ、そんなことはいいんですけど……」

雅人は慌てて福田と則尾を紹介した。席を立った福田は懇懇に名刺を交換し、そのまま自分がいたソファを竹崎由布子に勧めた。遠慮がちにソファへ座り、3人の名刺を見る由布子の目もとには、心なし疲労の色が滲んでいる。妹の七海ほどはパツチリはしていないが、目尻でやや跳ね上げたアイラインのためか、目には勝気な色香が漂っていた。その切れ長の目が、おもむろに雅人をとらえた。

「カシオペアで亡くなった女性ですが……妙な言葉を残したと聞きましたけど」

「死の海に來い、ですか？」

「ええ、そうですね。妹から大前さんがその謎を解明したと聞いたものですから」

「まだ確証はありませんが、シノウミという言葉は、死んだ海ではなく、シノというワードにタケカラムリの篠という字を使うのではないかと考えたんです」

「妹の話では、その名前のついた施設が東伊豆にあるということでしたけど……」

「ネットで検索したら、篠海の青椿堂と灯明台の2つの施設がヒットしました」

「どんな施設なんですか？」

「それは、つまり……トイレのことです」

「トイレ？」

「はい、トイレにつけた名前なんですよ。灯明台に関しては情報が少なくてはっきりしません。それで来週の土日あたりにその施設の確認に行ってみようと思っています」

「そのことは妹からも聞ききましたけど、危険はないんでしょうか？」

由布子は不安そうに目を細めた。そのとき福田がぼそつと声をかけた。

「竹崎さんは城ヶ崎海岸になにか心当たりはありませんか？」

突然の質問に、「えーっ」と目を開いた由布子は、「いえ、ありませんが……」と否定した。すると福田は由布子の顔を鋭い目で睨み、

「きのうヨーロッパから帰国されたそうですが、それは長嶺会長の件ですよね？ 竹崎さんは、長嶺会長の事件を、いつ、どこで知ったんですか？」

一瞬、幽霊でも見るように胡乱な目で福田を凝視した由布子は、すぐに目を伏せ、暗澹とした視線をテーブルに這わせたが、すぐに観念したように、肩で大きく吐息した。

「長嶺のこと……ご存知なんですか？」

「おおよそのことは」

すると由布子はテーブルの端においた名刺をちらつと確認し、

「失礼ですけど、あなたは……どのような素性のなんですか？」

「名刺にあるとおり経営コンサルタントですよ。ただし裏世界のジャーナリストたちも多少は知っていますね。ところで……犯人は大陸のマフィアですか？」

再び由布子の顔に狼狽が走る。

「なにを根拠に……？」

「あてずっぽうですよ。カシオペア車内やオクタンペ湖で死んだMAファンド調査員のこと、それに、オンネトーで死んだ亀山元議員、東雲湖で死んだ白石局長などの情報を、論理的に組み立てただけです。これは金銭目当ての犯罪という域を超えていますからね」

『あてずっぽう』といいながら、口調には『どうだ』といわんばかりの確信があふれている。そのとき則尾のおっとりとした声が福田と由布子の間に割って入った。

「ところで道警とはもう連絡をお取りになったのですか？」

「ええ、昨日の午後……」

「あなたが北海道へ来たのは道警の要請があったからじゃないんですか。もしかしたら大前さんと会うのも道警の意図が働いているんじゃないですか？」

「それは違います。ここでお会いしたのは私の意志です。大前さんが死の海の謎を解明したと妹から聞いたものからです」

由布子は困惑気味に否定したが、則尾はまるで意に介さず、

「カシオペアで死んだ女性の素性はご存知ですか？」

「素性？」

「ええ素性です。もしかしたらCIA関係じゃないんですか？」

「またも由布子の表情が固まった。」

「なぜ、そんなことまで……」

「先ほどの福田と同じで、あてずっぽうですよ」

口調はのんびりしていたが、その目は鋭く由布子に注がれている。

ふいに由布子の表情が柔らかくなった。

「あなたがたにはなにも隠せませんわね……でも親会社から頼まれたときは、私もMAファンドの調査員の接待としか聞いていませんでした。ちょうどヨーロッパへの出張予定がありましたので妹に頼んだんですが……すぐに長嶺があんなことになって……私にはなに

がどうなっているのか……」

言葉の終わりは、涙声となって震えた。それを庇うように福田はソフトな口調でいった。

「お気持ちはお察しします。われわれもその件に関して調べているんです。もちろん本気で事件の真相を探りたいと思っと思っていますし、私が北海道へ来たのもそのためです。大丈夫ですよ。組織的な誘拐の場合、無事に解放されるケースが多いんです」

軽くうなずいた由布子は、バッグから取り出したハンカチを目にあて、絞り出すような声で懇願した。

「お願いです……長嶺を助けてください……」

福田は周囲を気にし、僅かに由布子のへ顔を寄せると、囁くようにいった。

「警察も秘密裏に動いているようですが、われわれもここ数日はこっちに滞在して調べてみます。こっちのルートでわかったことがあればお教えしますよ」

「お願いします……」

由布子はハンカチを膝もとで握りしめ、深々と頭を下げた。そしてテーブルを見つめたまま小さく吐息すると、ふいになにかを思いついたように顔を上げた。

「こちらでのご宿泊先はもうお決まりですか？」

「これから札幌に行つて決めようと思っっています」

「それでしたらぜひ私どもの親会社のホテルにお泊まりください。お礼としては失礼なんですけど宿泊費はこちらで持たせていただきます」

「いや、そこまでしてもらつたんじゃない……」

「ぜひそうしてください。札幌近江ランドでいいかしら？ 私もそこへ滞在する予定なんですけど……ちよつとお待ちください」

由布子は携帯電話でホテルのフロントに確認すると、

「大丈夫ですわ。ツイン一部屋でよろしいかしら？」

「しかし我々の滞在は長引く可能性もありますので、そんな高級ホテルじゃあ……」

「ご心配なく。関連会社に割り当てられた宿泊枠がありますから、何日お泊まりになつてもけっこうですわ」

「そうですか……それならお言葉に甘えようかな」

恐縮する福田に「遠慮なさらずに」と笑みを返した由布子は、ふいに真顔で雅人を見た。

「妹のことをよろしくお願いします。七海は相当にショックを受けています。私がついていてやりたいんですが、警察のこともあってこちらへ来なくてはならなかったものですか……お忙しいとは思いますが、助けてやってください」

憂いに満ちた目で見つめられた雅人は、一瞬頭が白くなった。

「はあ……あの、妹さんとはこれから羽田で……」

「聞いています。妹も心の不安を誰かに話したいのだと思います。よろしくお願いします」

由布子の目に力がこもる。緊張感で硬直した雅人の腕を則尾の肘が小突いた。

「大前くん、お姉さんのお墨付きになつたな！」

その揶揄に、雅人は哀れなほどうろたえてしまった。

羽田空港の到着ゲートには、カジュアルなパンタロン姿の七海が待つていた。

「やあ」と近づいた雅人に「すみません」とひとこと詫び、

「姉とお会いになりました？」

「はい会いました。それで……長嶺会長のこともお聞きしました」

「そうですか……姉はそこまで話しましたか……」

悄然とつぶやいた七海はすぐに笑顔を繕った。

「大前さん、お食事は？」

「あっちの空港でお姉さんにご馳走になりました」

「それでしたら大前さんの自宅まで私の車でお送りします。車のなかでお話を聞かせていただけませんか？」

「いいんですか？」

「大前さんもお疲れでしょうし、姉が長嶺会長の事件ことを話したと聞いて、私も気持ちが楽になりましたから」

「それじゃあ、そうさせてもらいます」

案内されたパーキングには白いBMWが待っていた。緊張しながらあけた助手席のドアから、南国の花のような情熱的で爽やかな香りがフワッと這い出した。

《彼女の香水だろうか？》

複雑な気持ちで助手席に腰をおろすと、雅人の住所を確認した七海はカーナビをセットし、ゆっくりと車を出した。

「北海道では、篠海のほかになにか収穫はありました？」

首都高速の料金所を抜け、本線に合流したとき、それまで無言だった七海が口を開いた。このところの経済不況の影響か、土曜の夜だというのに車の数はまばらで、首都高速はスムーズに流れている。

「収穫というほどでもありませんが、もうひとつの考えにも気づきました。死の海は琵琶湖のことじゃないかということですよ」

「琵琶湖？」

「ええ、琵琶湖はかつて淡い海と書いて淡海あづみと呼ばれていましたが、四季観光産業の発祥は滋賀県の彦根市でしょう？ そこからの連想で、コイツというのは、琵琶湖にいる魚の鯉、それが鯉ヘルペスで大量に死んだって情報があったんです」

「大前さんは発想力が豊かなんですね」

「いやあ、これは同行した旅行作家の発想ですよ。そうだ、お姉さんの厚意で彼らは四季観光産業の札幌近江グランドホテルに宿泊させてもらうことになりました。彼らは市内のビジネスホテルを予定してたんでしょうけど、それが、いきなり超一流のシティホテルですからね。喜んでいました」

「姉も頼りにしているんだと思います」

「ちょっと怪しい連中ですけど、裏社会には明るいようですからね」

「あら、そんなこといって……」

笑った横顔の背後でオレンジ色の東京タワーがそそり立っていた。

車内に漂う芳香のせいだろうか、それとも疲労した体のせいだろうか、雅人は七海の横顔に、理性を麻痺させてしまうエロチックな翳りを見たような気がした。